

富山県成長戦略会議 まちづくり戦略プロジェクトチーム 第4回 持続的な魅力ある田園地域検討専門部会 議事要旨

- 1 開催日時：令和5年7月11日（火）14:00-16:00
- 2 開催場所：となみ散居村ミュージアム
- 3 出席者（五十音順）

役 職	氏 名	備考
グリーンノートレーベル株式会社代表取締役	明石 博之	座長
ナチュラル美食セラピスト	荻布 裕子	
朝日町埋蔵文化財保存活用施設 まいぶんKAN 学芸員	川端 典子	
NPO法人立山クラフト舎代表理事	佐藤 みどり	
合同会社山崎満広代表	山崎 満広	

4 内容

(1) 事務局より資料説明

資料について戦略企画課より説明

(2) 委員発言要旨

【明石座長】

- ・7月に入り、行政における予算要求の時期の前に、この専門部会として何か打つべきもの、来年につながるものを出していきたい。それを議論で終わるのではなくて、事業化に向けた何か布石を打っていききたいなと思っている。
- ・6月26日に開催された令和5年度第1回成長戦略会議では、安宅特別委員と朝比奈委員から、本専門部会に対して、こういう時代だからこそ、しっかり議論すべきという応援コメントをいただいた。

<資料1 重点的検討課題について>

【山崎委員】

- ・どういうふうに誰が実行するのか、ということは資料1には含まれているのか。

【明石座長】

- ・資料1には、誰がやるかは入っていない。主語がないので、まだ規模感も分からない。個人でやることと、大きな企業でやることと、行政でやることと、地域でやることってあるので、そこに主語を与えていくという作業が、今から。

【佐藤委員】

- ・初回からお伝えしているのが、どうしても地域の中心が還暦以上の方々で、それをもう一度、現役世代に戻さないといけないと思っている。若い世代に取り戻すみたいなのも、プラスで書いていただきたい。

【山崎委員】

- ・それは農村だけじゃなくて全体でという意味か。成長戦略会議では、世代交代の話とか人口の話は議論になっていないのか。

【事務局】

- ・成長戦略会議でも、しっかり指摘されている。若い世代の流出、特に女性の流出が課題と言われている。その上で、富山から出て行く人はしっかり応援して、外で成長されて、その人がある節目で振り返ったときに、帰ってきたくなる富山県でありたい。人口が減少していく社会の中で、視点を富山県内（の定住人口）だけに置くのではなくて、最初から県外にも向けて、関係人口の増により成長戦略を進めていく。富山のウェルビーイングを高めることで、いろんな人が富山って変なことをやっているぞ、ウェルビーイングを高められるぞ、チャレンジができるぞという富山に、どんどん新しい価値を創出する人が入ってくる。人材交流の活性化とそれによる人材の集積が成長戦略の中核となっている。佐藤委員のご指摘は、成長戦略の根本のテーマ。

【佐藤委員】

- ・今、現在田園地域の中で中心になって動いていらっしゃる方は、一番人口の多い65歳以上の方々で、その方たちは、地域のストッパーにもなるし、大きな味方にも成り得る人たち。
- ・新しい事業がうまくいっている地域というのは、新しい視点やセンスある要素を持つ

てくる若者がいて、地域に顔が利く地元の年長者が一人でも仲間に入って下さる事でスピード感のある成功につながっている。

- ・地域の復興も同じ要素があると思っていて、東日本大震災後、地域によって復興格差が結構生まれている中で、女川町はスピード感がある復興により復興のトップランナーとなっている。何でそうなのかというと、震災の1か月後に、地域のあらゆるところのトップの人たちが集まった場で、復興連絡協議会の会長さんが、こんな話をされた。「今日、復興協議会が発足して、自分は会長を務めるけれども、復興に10年、まちづくりの成果が分かるのにはさらに10年かかる。だから、20年後に責任が取れる30代、40代にまちづくりを任せて、自分を含めた還暦以上は、全員顧問になって口を出さない。20年後に生きているか分からない我々が復興しても仕方がないし、責任も持てない。だから、20年後も生きている若い人たちがやりなさい。君たちがイベントや資金が必要ななら、自分たちは金策もするし、世間から何かを言われれば、弾よけにもなる。だからお前らがやれ」
- ・上の人たちが若い人たちを信頼して、チャンスを与えてくださったと。状況は違うが、そういう状況がつかれないかと思う。田園地域は、青年団とかがどんどんなくなっており、若者が地域のために話し合う場がない。地域づくり委員のような感じで年齢を区切るなど、若い人が話し合える組織をつくってほしい。

【明石座長】

- ・誰がやるのかという部分。これを誰がやるかで、やっぱり結果も変わってくるし、今までどおりの声の大きい人とか、年齢層が上の方がやるイメージと、若い方がやるイメージって随分、結果が違ってくる。
- ・資料で整理された内容は、何をやるか、D oの部分。これを、誰がやるかということを経事録にしっかり残して、専門部会としてやっていくんだという発信をしたい。

【山崎委員】

- ・今、佐藤委員がおっしゃったようなことが、現実には井波で起こっている。私は去年からイナミライといって、20代から40代の人だけを井波のいろんな地区全部から呼んで、そこでビジョンづくりをしている。ちゃんと毎月集まって、初めは10人ぐらいしかいなか

ったが、出ていく人もいれば入ってくる人もいて、多いときには20人を超えるの参加率。

- まず1つ感じたのは、例えば、井波とか南砺市とかの行政区で区切ってしまうと来られない人が出てきたりする。住んでいる人と働いている人は別。そこで住んで働ける人はより参加してくれるという感じがするが、数は少ない。その代わり、そこで働いているけど住んではいませんみたいな人も歓迎してあげると、割と来てくれたりもするし、そこに住んではいたんだけどとか、おじいさんが井波の人とか、そういう人も入れて少しずつ増やしていく。
- それで分かったのは、初めの課題が、プレーヤーがいませんという話だった。プレーヤーは、ジソウラボしかないという話だったので、そのときはジソウラボの頭数は7人だったので、我々が地域づくり協議会の皆さんにお願いして、とにかく若者全員をリスト化してくれと言ったら、105人ぐらい挙がってきた。「いるじゃん」と。その中で、単身赴任で不在の方とかを抜いてもらって、実際に地域に残っている何かできそうな人に声をかけて、ちゃんと来てくれたのが12名。そこから、その人たちのコネで、砺波で働いているとか、高岡で働いているとか、実はこの人富山市に通っているんだよという人たちも時々来てくれるようになった。その間に、H a i z c o f f e eとか新しいお店が入って、その移住者が入ってくれたので、だんだん増えて減って、20人ぐらいで収まっている。
- それで今、1年近くたって、ようやく戦略とアクションプランぐらいのところまで来たら、承認する委員会が上にあって、まちづくり協議会の会長さんたちと井波地域から出ている議員さん周りの平均年齢70歳くらいの人たちが、急に文句を言い出した。いや、聞いていない、そんなことをやるって聞いていませんと。そもそも君たちだけで決めていいものかと。じゃ、どうすればいいかっていったら、さっきの話と同じで、彼らは責任取らない。ビジョンが出来上がる頃、そのビジョン・プランが実際に実行して、十数年残っている間、2040年には絶対にいないプレーヤーだから。それがよくないよねという話を、今月末からする。
- もともと、ビジョンづくりの2年ぐらい前から、旧庁舎の再生の話とかもあって、その頃にできたプランというのは、まるっきりその世代の人たちがつくったプラン。2年ぐらいかけて、大勢の方々が何十回も議論してつくって、すばらしいコンセプトができて、「じゃ、これ、できますか」と私に実現可能性調査を頼まれて、できませんと判断

した経緯がある。もう1回その話もするし、そもそも責任が持てないのに、予算だけあるからとか、これが建ったら誰かが来るはずだからみたいに作っておいて、実際、自分たちが手足を動かしてやらなきゃならないときに、何もしない人たちが、ごっそり人口の一番多い世代に存在している。

- ・それは多分、危機感の問題で、さっきの女川町の場合は危機感があった。井波は、割と危機感があるほうだけど、まだ緩い。「明日まちがなくなるかも」がない。そこまでいってないから、上の世代の人たちの危機感は薄くて、この1年間頑張ってきた20代から40代の意見を聞かないで、あなた方がそれを進めたところで何が起きるのかというと、以前の二の舞いだし、その前の二の舞いだしという形でずっと続く。
- ・その危機感は今、行政レベルと民間レベルの全部で植え込んでいかないといけない時期だと思う。加えて、リーダーシップのスタイルが、トップダウンが当たり前の頃の人たちだから、上に立っている人が偉ければいいって思っている人もいる。それが改革の種で、そういう時代はもう終わって、しばらくたっていますというのを、議論として上げていくのが必要で、それをうまく伝えなきゃいけない。

【川端委員】

- ・こういうふうに思っているけど、地域の人にはなかなか言えない。なので、外の人、住んでいない人、職場だけの人という人が入っているというのは大事だと思う。
- ・どういう枠組み、どういうシステムで、そのチームを動かしていくかというところに、そういうものを埋め込んでいかないと、人が変わったときに同じことが何回も起きてしまう。毎回毎回、外の人が言ってくれるとは限らないので、教育とか、さっき佐藤委員がおっしゃっていた若者たちのチームをつくるのでも、その運営の仕方に、そこをどんなふうに変えていくかというシステムをつくらないといけないと思う。

<資料2 議論のフレームとタイムライン>

【山崎委員】

- ・タイムラインについて、もっと早くできないか。年度をまたぐ必要はない。

【事務局】

- ・あくまでもイメージなので、必要に応じて実行時期が前倒しになっても構わない。

<参考資料1 明石座長ご提供資料>

【明石座長】

- ・第3回会議が終わった後に共有したもの。前回、育てるべきは個人という話と、支援対象って企業なのかという話が後半に出てきて、擦れ違いが起きているのかなと思って書いてみた。ビジョンは10年後ぐらいを目安に設定しようという話があって、社会的な前提として、10年後は人的リソース不足であって、特に若者世代が足りないという話があった。
- ・2つ目に、この専門部会は話だけで終わるんじゃなくて、県の予算も確保しながら、経済的なものを追いかけるだけではなくて、ソーシャルインパクトを生み出す社会的な事業家の育成みたいなことをやっていきたいという話があって、3はビジョン実現のための課題は、人材育成の仕組みづくりが必要じゃないかという話。そのときに出たのが百姓というキーワード。百姓っていい響きだよ。でも百姓って、いわゆる百姓とは違う意味でというような議論があったりして、これを仕組み化していこうという話が出た。その中には、マインド醸成とか学校教育も大事だし、適正な情報共有も大事だし、体験機会も要るし、プロ的に議論をまとめたり、形にして企画をするという人も必要だし、地域住民だけじゃなくて、プロフェッショナルの伴走者が必要だし、資金的な援助も必要だしという話があって、これを仕組み化していきましょうと。何か困難が生じたときは、施策だけじゃなくて県を交える、という話。
- ・6番には、何かと若者、移住者が地域外から来てというような語り口調で言われる中、いやいや、地元でずっといる若者もいるし、中学生もいるし、いろんなイベントの主催者もいると。そこで働いている人もいるよねという。こういう人たちを、田園地域といわれる、例えば、集落だったり市町村ごとのコミュニティだったり産業だったりという人たちを応援しつつ、仕組みづくりを提供していきましょうと。そういう大きなコミュニティづくりという仕組みを、それぞれの地域単位で田園地域の課題となるテーマとして取り組みましょうという話。
- ・単に、課題がないまま、人材育成はできないし、実際の取組みテーマがあって初めて、そこに関心を寄せる人が集まる。その具体的なものは何かというのはまだ出ていないが、OJTでやっていこうという話になった。それをぐるとまとめたもので、恐らくこの中には、佐藤委員ご指摘の、今までだったら世代的に責任を持ってない人が、これか

らのまちのビジョンを語っているのが不安だから、これからの人にどんどん参加してもらって、意見を出して、ただ言ったからにはちゃんと責任を持ってやる、そういうことをやっていくというものも含まれるのかなと思っている。

- ・もう1点、私から具体的な課題、田園地域の課題に取り組むことで、OJTの機会が必要だということにひもづきつつ、空き家を使ったアートの祭典を提案したい。富山でこそ田園地域の魅力づくりをしていくこの専門部会の、課題解決の手法となるものが、こういう芸術祭なのかなと思っている。その中には、単にイベントをすとか、集客とか観光という文脈だけではなくて、芸術祭と言いながら、田園地域のいろんな社会課題の解決手法として、何か仕組み化できないかなというものが、この芸術祭のイメージ。
- ・まちづくり人材のOJTの場にもなるし、何かをする中で人材育成していかないといけない。イベントを通じて、来場者とかアーティストとの関わりによって、交流人口が広がったり、単にそこに来てくれるということで、田園地域の魅力にも気づいてもらえる。
- ・先日、立山町のKOTELLOに行ってきた、非常にいい場所だなと思った。ああいう農山村にある廃校を利用して、田園の芸術祭をやっていくに当たっての各エリアでの拠点になるような場所をつくったりとか、農地、山林の活用、ワークショップ、ここに例えば、おにぎりの話とか薪の話とかが入ったりするイメージ。
- ・企業誘致と支援、これも実際に芸術祭をやろうということが、来場者に対するサービスだったり、ある種社会実験ができるという土壌ができるのかなと思って、ここにもいろんな企業に参加してもらおう。もちろん、既に会社化しているところもあれば、今から起業しようとする人でもオーケー。
- ・空き家の活用として、この前、内山邸でまさにやっていましたけど、建物を活用した空間を使ったアート作品を展開して、そこに来場者が魅力を再発見すとか、空き家の活用にもつながるといふことにもなるのかなと思ったりとか、子供たちの未来を考えるという意味では、幅広く、職業のことから生きる意味を学ぶ機会にもなるのかなと思う。そのようなソリューションとしての芸術祭ができないかなと思っている。相当なりソースも必要だし、そもそも誰がやるんだというのもあるが、誰がやるんだというところから来年度、議論を始めてもいいんじゃないかなと思っている。そもそも、予備調査だとか、誰が主体者と成り得るか、担えるか、どういう可能性があるかということ、

議論だけじゃなくて、調査研究するような事業を立ち上げるのも面白いのかなど。

<全体を通して>

【川端委員】

- ・仕事でいろんな事業や企画を立ち上げる際、どうやって実行するのかと同時に、その事業をどうやって終わらせていくかも最初に考えるようにしている。問題解決のための事業なので、問題が解決したらその事業はなくなっていいと思う。
- ・ただ、問題解決のために人を呼んで、問題解決したからその人たちが、「じゃ、解散」というのも寂しい。なので、さっき座長がおっしゃったような芸術祭とか、そういう楽しいことに移行していくのは、すごくいいやり方。
- ・芸術祭の話について、いわゆる祭りなのかなと思う。地域の祭りは、地域のすごく小さな単位でやったりする。私が住んでいたところは、もうほとんど担い手がいないので、子供の行事であるおみこしもなくなってしまい、何人かいる僅かな子たちが参加する場所がない。なので、県を挙げての新たな祭りがあれば、お祭りに参加できない子たちが入ったりできるので、フレームとしてすごくいいところができるのかなと思った。
- ・祭りというのは、娯楽のない時代の楽しみ。例えば、庚申講とかお祈りとかであってもみんな楽しみに待っている。私がすごく好きな、庚申講とかいうお講は、60日に1回、庚申の日にやるお祭り。平安時代に日本に入ってきた祭りで、江戸時代に庶民に広がった。内容は、夜、寝ないで、一晩お酒を飲みながら、みんなで集まって、徹夜をするというもの。
- ・庚申の日に、悪いことをした人間の体の中から、三尸の虫という虫が出てきて、天の神様に、この人は悪いことをしたと告げ口する。そうしたら、3日間寿命が縮まってしまう。だから、寿命を縮めないために、寝なければ虫が出ていかないから、悪いことをしないじゃなくて、寝なければいいんだという発想で。伝わったときはもっと厳粛な行事だったはずだが、江戸時代に娯楽として広まって行って、男性だけのお祭りとして、寝ないでみんなで集まって、家の持ち回りで飲むという。もともとは宗教というか、真面目な考えから始まっているんだけど、すごく面白くて、みんなが集まる機会になったり、長い話は庚申の日にしようとかいう感じだったみたい。
- ・だから、お祭りに理由は必要だが、必ずしも祭り本来の理由でなくても別にいいのかなと思う。地域の祭りというと古そうに思うが、意外と祭りというのは、誰かが最初に始

めて、それが持続しているから伝統的になっている面もある。だから地域に関われなくなってしまった人たちのための大きな祭りがあってもいいのかなと思う。

【荻布委員】

- ・田園の芸術祭、初めこの文字だけを見たときに、芸術祭って、結構いろんなところでもやっているなと思ったが、説明を聞いて、狙いをしっかり定めてやれば、すごく差別化できるものになると思う。
- ・川端委員がおっしゃったように、お寺とか神社とか昔の文化をうまく組み合わせたらいいのかなと思う。例えば、うちの地域だと青年団がなくなって、獅子舞を休止しているが、地元の人が選挙に出るときやイベントのときに、軽く舞ったりしている。そういうのって残っているし、みんな残したいと思っているけど、昔ながらのやり方ではなかなかできない。なので、うまく昔のお祭りだったり郷土料理だったりを取り入れていったらすごくいいんじゃないかなと思う。
- ・富山は浄土真宗王国なので、お寺を起点にいろんな文化が残っていたりする。朝日町のバタバタ茶も蓮如上人から伝えられたとか。私に最初に地元の山菜料理を教えてくださいましたのは、同じ地区内のお寺の方で、そのお寺で代々報恩講のときに出しているお料理のことを教えてくれた。一昔前は、みんながお寺に集まって葬式の準備などをしていた。だから、お寺や神社の要素も取り入れることで、深みが出るのかなと思う。
- ・私が住む地域でも廃校が交流館になって、いろいろイベントをやっていたりとか、地域おこし協力隊だった人が空き家を活用して「アーティスト・イン・レジデンス」のような試みを企画したりしている。また、昔ながらの古い家々の景観が結構残っていて、改めて古い家、今日の会場もそうですけど、昔ながらの富山の建築を知っていただく機会とかもすごく大事だなと思うので、もし芸術祭が実現したら、建築の魅力を語ってくれる方もナビゲーターでいるといいなと思った。

【明石座長】

- ・先日、内山邸という富山県内において非常に立派な豪農の家でアート作品の展示があった。アート展示自体は大地の芸術祭とかでもよく見るが、1つの大きな建物中にいろんな作品を置くというスタイルでいうと、ちょっとほかの地域と違うなと思った。生活臭がまだあるような建物の中に、女の子の彫刻がちょこんと座っていたりして、どきっ

としたりとか。展示されているものはアートだが、結局、一番よく見えているのは建物だと思った。そういうアートの在り方ってありなんだなと、実体験として感じて、あれが相当ヒントになった。

- ・氷見も含めて富山には大きい家がいっぱいあるが、広過ぎるということで敬遠されるというか、住まいというイメージで見ると、自分には全然縁がないと思われるけれど、活用の方法を提案することで、みんなで住むと楽しいかもとか、いろんなふうに見えてくるんじゃないかなと思っている。

【山崎委員】

- ・多分、このお祭りの案はすごくいいので、どうやって差別化を図ってやっていくのかというのはいいい方向性。最近、富山が熱いというのは日本中知っているから、熱いなりにやって考えた結果の一つがこれだ、みたいにちゃんと出すんだったらいいなと思う。県の実践としてゆるく今年度はこれです、みたいな出し方はよくない。
- ・あと富山の利点を活かさなきゃいけない。先日、県のブランディングに関する会議の話聞く機会があった。その中で、「あ、そっちなの」みたいなのがあって、まず部署の名前を「すし」に変えようと。それもずっと頭に残っていて、いろいろ考えたけど、確かに富山の絶対的な強みとして富山湾があって、このブランドは誰にも負けない。
- ・もう1つ、富山の家はでかい。都会では余白がない。それを活かそうとしていない。空き家になってしまう。そうじゃなくて、すごくでかい空間があって、めっちゃくちゃ丈夫な家がたくさんあるので何かに使わなきゃいかんと思った。それで、散居村のようなでかい建物をこんなふうに使っちゃえるんだよということを見せるのも、1つかなど。空き家じゃない何かとして、ちょっと突拍子もないアイデアをアートとして押し出すのも、面白い。
- ・さらに1つは、米。米の話をもうちょっと飛躍させたほうがいい。要は、富山の米じゃないといい酒は生まれない。富山の米がなかったら、すしブランドができない。それを支えているのは、田園地域でしょう。そこがもうちょっとうまくつながってくるといい。
- ・その文脈でいうと、佐藤委員が発言された、一番人数が多い年齢層の人たちが支えてきたものだから、話のきっかけになる。でも、その人たちは20年後にはやっていませんよねというときに、今から20年を支えるのは若い人たち。そこから育てていく、盛り上げ

ていく、新しい企画を出していくのは若い人たちというのも、ちゃんと丁寧に伝えたら、人口が多い世代にとっても自分たちが自信を持ってやってきたことなので、乗ってくると思う。

【佐藤委員】

- ・私は、まず何かをするに当たって、人が必要。人が見えてこないこの現状をどうにかしなきゃいけない。芸術祭もいいし、お米もすばらしい。しかし、それをするチームをまずつくってあげないことには、何も始まらないと思っている。
- ・各市町村で取り組まれる中から出た案が、芸術祭だったりお米だったり、空き家活用だったり、それぞれの地域が抱える問題で、その地域でまさにそこでプレーをする人たちからの意見、思いで企画が生まれ、実行に移すというのが一番いいと思う。
- ・「富山」という枠で、何かしましょうというのは、ちょっとテーマの趣旨から外れている。小さい単位のチームをつくりたい。私は、芸術祭のもうちょっと小さいタイプの立山C r a f tをしている中で、その様なイベントを県全体を会場としてやるというのは違うのかなと。
- ・やっぱり思いがある人がいるからこそ、継続するイベントになっていって、「しあわせデザイン」も、誰がトップでやるのかというのが見えなかったからこそ、私は入れなかった。明石座長が芸術祭をされるのであれば、そのチームができると思う。でも、漠然と県がやりましょうってなると、違う。だから、まずは各地域でチームをつくるのが、大事ではないか。

【明石座長】

- ・いろいろ同時並行にやってもいいのかなと思う。あえて資料を作ってきたのは、芸術祭は自分がすごくやりたいことではある。それに協力、共感してくれる人とやるというイメージがあって、いつか、それぞれの社会課題とドッキングしていけばいいというイメージ。それぞれ違うところでゲリラ的に始まったものが、最終的に塊に見えてくるみたいな。そういうのが理想。
- ・でも逆に、どこに向かっているのか分からない不安を感じる人もいて、こういうところがあつたらいいねというビジョンだけを共有しておいて、それぞれのやりたいチームが、そこに向かえばいいというイメージを持っている。

【川端委員】

- ・私は、大きく県でやるというのは全然考えていなかった。最初に風の谷が出てきて、モデル地区をつかっていくという話があって、その規模ぐらいのイメージ。全体でやるというと、やっぱり散漫になるし、越後妻有とかも地域の1つでやっている。大きくやる、県がやりますみたいなのは、上から降ってきたみたいな感じになっちゃうので、モデル事業として出てくるという小さいところから始めるのもあり。「これを成功させたい」という意欲に、こういう社会的な課題も加えたりという感じで広がっていくと、モデルがすごく充実していくと思う。

【山崎委員】

- ・いろんな地域の人たちが、若者プレーヤーとしてやりたいことがあって、見えないところで支えているのが県の仕事。それが県の戦略になって、表舞台に出て、県で田園の芸術祭をやりますじゃなくて、明石さんがこれをやります、朝日町の誰々がこれをやります、いろんな人がやりたいよと言ってきて、それを全部支えられるような仕組みを持って、裏舞台で一生懸命動いちゃっているのが県だというのが格好いい。その役目をお勧めしたい。そうすると、やりたい人たちが活きるし、多分その人たちはがっちり組まなくても、同じ方向を向いて、何回も何回もやっていけば、おのずとその地域はよくなる。
- ・様々な地域で同じように人を集めるというのも難しい面はある。その地域なりのつながりで、やっていることが多いから。ここは神社の集まりが強いとか、ここは青年会がとか、ここは消防団がとかある。それをうまく読み解いて、一度集まってしまえば、ある程度の集団ができると思う。
- ・地域によっては、誰もやりたくないというところもある。そういう地域は「あ、やりたい人いないんですね、今は地域にとってそういう時期じゃないんですね」と言って、放っておいてあげるんだけど、権利は与えるという感じ。何かをやりたくなったらここに電話をくださいみたいな。そうすると、他の地域と同じサポートが受けられますからというのを与えておけばいいんじゃないか。地域にも自発的になってほしいので。

【明石座長】

- ・間違っても、こんなのをやるので協力してくださいって回るのではなくて、それぞれの

地域でやりたい人が、やりたいことを始め、それを俯瞰している誰かが他の地域・人と共通するものを見つけて、こっちとつなげてみようと、こっちの困りごとをこっちで解決してみようととかというものが生まれてきて、10年たってみれば、「ああ、〇〇だね」というプロジェクトに見えればいい。

【佐藤委員】

- ・今、県の中山間地域への補助は何があるのかというと、中山間地域「話し合い」促進事業というものがある。自治振興会とかを補助対象として、ファシリテーターが来て、地域の課題につなげて、何が必要かということを読みしてくれる。この事業では、自治振興会とか上の世代がターゲットで、若い世代はターゲットではないということを知っていて、それならもっと若い世代の集まりを設けられるような仕組みがあって、ファシリテーターがちゃんと来てくれる事業のほうが必要と感じる。

【荻布委員】

- ・人材育成プログラムとして、地域で活躍できそうな若者が集まって、そのプログラムの中で、例えば芸術祭を一つのフィールドワークとして、プロジェクトの実行をサポートするという形だったらどうか。
- ・さらに、県外の関係人口チームみたいなのをつくれたらいいなと思う。前回の仕組みづくりの話をしているときに思い出したのが、丸の内朝大学という東京の人たちが富山に何回か通って、一緒にプロジェクトを考えるという取組み。東京に住んでいた頃、東京の関係人口側として関わった。自分がその立場だったときには、地域の人との細かい調整や協力体制作り、自走体制作りなど、真の意味での活性化といったことには深くは関われなかったが、その取組みで地元の受け入れ側で関わった方々はその後も地域のプロデューサーとして皆さん活躍されているというような感じがある。それがより進化した形で、地域側のプログラムがあって、関係人口チームがあって、お互いに中長期的に一つのプロジェクトを作ってみようというシステムがあるとテストケースとしていいのではないかな。

【明石座長】

- ・芸術祭は、何かをやるための仕組みであり、こういう仕組みづくりに対して県から協力

とか支援があると。では何をやるのというものが次にあって、それは仕組みづくりの基盤の上に与えた条件の中で、このチームが考えていく。何がその地域に必要なかは、それぞれのチームで考えるというものだと思う。

- ・専門部会として何か1つの事業を打ち立てるというわけではなくて、それが幾つもあって、年に何個でもいいし、毎年クリアしていくのでもいいが、順番に取り組んでいてもいいのかなという感じがする。何か1個を強力にやろうというのではなくて、まず、1つのプラットフォームを作ろうという話。

【山崎委員】

- ・主語の話に戻ると、主語のグラデーションがあって、ものによってはインフラとか金がかかるところは県がやるとか、県と市で何かやったほうがいいとか、国もまたいでやったほうがいいとかがあるけど、ある一定のことは、多分官民の連携でやらなければならないくて、あることは完全に民間の地域の人たちの消防団で、みたいなこともあっていいと思う。そうすると、多分ほぼ民間が考えたもので、支援を受けてやるというのが当たり前であって、でも地域に考える余力がなくなっている。
- ・そうすると、この路線で考えて何が起きるかという、多分、プレーヤーを集めたところで5人とかしかなくて、その人たちが、自分たちの生業を守りながら新しいことを考えることが大変だから、ちゃんとしたファシリテーターが入るべきで、インタビュー形式で聞いてあげながら、自分たちで10年後、自走しながらできるものって何だろうって考えていったときに、人的支援もお金も必要だし、ほかにも専門家が必要だとなる。それを継続できる形で走らせられるのって相当難しい。それって、やるべきか、やらないべきかということと、何を持って成功とするかということ、それからどうやって終わらせるかということも考えなければいけない。というところまで考えて初めて、この仕組みをちゃんと担わせられるという感じ。
- ・大きい地域だったら、今でもそのままできそう。いいファシリテーターが入って、一、二年かけて、じゃ、そのプロジェクトやりましょうという実験をして、調整してうまく回すという。しかし、小さい地域で、40年後に人口が今の10分の1ですみたいなところは、そこまでの落とし込みの仕方を、誰かがリーダーシップを取れるくらいまで持って行かなきゃいけない。地域によって大分、やり方が変わる。

【明石座長】

- ・確かに、集めても5人とか10人という地域もあれば、実はもう、ある程度やろうという人たちが二、三十人集まっていて、しかも、もうプロフェッショナルもいますよみたいな地域もある。やっぱり温度差もあるので、一面的なツールをぽんと出すのではなくて、カスタマイズ可能な、やり方すらもそれぞれの集落とかコミュニティで考えて、そこに専門家が伴走して、どういう在り方がいいかというそれぞれの仕組みづくりを考えてもらうという事業をやるにしても、誰が事業の主体者になるんだということ。地域がやるんだったら、地域が専門家を呼ぶのか。地域が呼んで、地域にお世話役がいて、事務局みたいなものも置いてできるかどうか。
- ・一方で、ある程度おせっかいするプロフェッショナルが行って、取りあえず集めて、話を聞いて、こんなんですかねって資料を出してたたき台を完成させていって形にしていくというのかでも大きく違う。
- ・前者は、補助金タイプ。地域でこんなことやりたい。その先にいろんなメニューがあって、まずは実行体制をつくった後に、事業計画をつくってもらい、実験をしてみたいな。プログラムがあって、地域完全主体でやる。そこに専門家が随時伴走者として入るってパターンもあれば、そもそもそれすらも考えられないですよという地域だったりすると、プロが最初からおせっかいで入って、あなたたち、こうやったらいいんじゃないですかというので、形をつくって引っ張っていってあげる。それは、県から委託されたプロフェッショナルが、地域に入り込むパターンで、割とあるパターンですよ。今もあるパターン。

【佐藤委員】

- ・上の世代を中心に新たなチームを組もうと思ったら難しいかもしれないが、現役世代は、みんなそれぞれの仕事で、それぞれのプロフェッショナルとして頑張っている人たちが地域にいる。なので、その人たちの能力とかを活かしてチームを組んだらいいと思う。まず、チームをつくらないことには。
- ・私は、集落の教科書をつくりたいという目的でチームを組もうとしているが、チームを組むのがまず大変。一人一人に頭を下げた。それが、県がぽんとチームをそれぞれつくりますと宣言して、男女共同参画推進委員みたいな感じでぽんぽんと、チーム作りを応援して欲しい。

- ・男女共同参画推進委員って、唯一いろんな世代がいて、若い世代もいて、あ、これはいいのかもって思って参加したけど、正直なところ、全然そんなことはなかった。

【荻布委員】

- ・「男女共同参画推進委員」については前回も話題に上がったが、私も委員になっている。総会に参加すると、女性が中心になってその会を進めているが、70代くらいの男性が、それにすごいやじを飛ばす場面も多々ある。それを見てとても、いたたまれない気持ちになるし、逆に男女や年代の壁を感じてしまう。

【山崎委員】

- ・いろんな年代がいてもいいが、統括ファシリテーターがいたら、絶対に黙らせなきゃいけない場面。そうしたら、話す場がちゃんとできるので、やじを飛ばす人がいても、話し合いが動くというふうにしていかないと。

【明石座長】

- ・今、佐藤委員がおっしゃっているのは、集落ごとにそれぞれの仕事のプロフェッショナルがいるから、そういう人たちが集まれば、何かチームができるんじゃないかということでしょうか。

【佐藤委員】

- ・各地元、集落ごと、市町村ごととかで集まって、まちづくりのプロフェッショナルじゃない人たちが、地域の為に何者かになれるための場所が必要だと思う。何もできない人たちというような雰囲気があったので、それぞれ会社で、何かしらの能力を持っている人たちがいたりするんじゃないですか、という。
- ・上の世代で集めたら、それは無理ですよ。それが下の世代で集まって、まちづくりを担うようなそういう会であれば、収める能力を持っている人もいるかもしれないと思っている。そこにファシリテーターの人を入れてあげたら、話は前に進む。その中で生まれるのが、いろんなプロジェクト。自分たちが責任を持って、自分たちの意見で進めていくのであれば、自分たちがプロジェクトのリーダーとしてやってという自覚が生まれると。

【明石座長】

- ・ということは、今必要なのは、チームは地元でつくりますと。集めるけれども、そういうファシリテーションの技術であるとか、事業を組み立てるときの、地元のチームだけじゃ足りないプロフェッショナルな何かが支援の手としてあるとすると、どの地域でも、いろんな事業ができるんじゃないかというイメージ。今はそういう取組みはないのか。

【事務局】

- ・佐藤委員がイメージされるような、若い人たち限定で、やる気のある人たちを集めてファシリテーターを派遣するという事業は、県としては今のところないと思われる。

【山崎委員】

- ・イナミライはジソウラボが基にいるから、ジソウラボの知り合いも多いし、まとまりやすかったが、やっぱり半分以上の人が、ふだんは井波に関わっていない人たち。だから、現在仕事をしている人たちも多いし、遅れてくる人たちも多いけど、思いは1つだし、上の世代、言ってしまうと、おじいちゃんたちに任せておいたら、またあんなことになるよねとか、みんな肌で感じているから、その危機感で集まっていることが多くて、確かに皆さん優秀。いろんなプロフェッショナルもいるが、やっぱり統括ファシリ的な、コミュニティーをマネージするような人というのはまだいなくて、いても本業とかで忙しいから、島田優平さんとかね。そういう人たちには、もうそれ以上仕事を与えられない。そのため私たちが、面倒くさいことは全部請け負ってやっているという感じ。
- ・その中で、その人たちのモチベーションを、どうやって高いままキープできるかというのが課題で、毎回2割ぐらい減るので、毎回1人、2人、3人と新しく入れたりしながらやっていて、ようやく、何となくコアチームが見えてきたのが1年後。

【佐藤委員】

- ・下の世代の人たちが、何も権限を持ってなくて、発言権も持っていない。集まる場も持っていない。未来に対して、絶望しかない。そこを、どうにかしないといけない。

【山崎委員】

- ・南砺市においては、市が井波のビジョンをつくるプロジェクトを立ち上げているから、目標がある。私はそのプロジェクトに参加しており、次年度に向けて、今年度末にはビジョンをつくり上げて、そこから計画を実行していったというのを全部やらないといけない。その責任を持つ人たちが、イナミライ。
- ・南砺市に、私のカウンターパートになる職員がいる。この人は井波出身で、私より年上で、ばりばり井波の人。ちょうど長老たちと若者の間の年で、我々が描こうとしている若者が考えるビジョンもよく理解して、重鎮たちの苦情もよく理解して、すごくうまく動いてくれている。こういう、ちゃんと井波出身の人で事情を分かっている人が入ってくれているが、それでも結構壁がある。私は壁壊し役。だからいつも、大きなイベントに参加すると、3人ぐらいのおじいちゃんがずっと文句を言うが、それが私の役割だから、そうですねってずっと聞いて、静かにメモをして、時々いいことを言うので、そういうことはちゃんとイナミライのみんなも納得する。そうすると、まちの将来を考えながら、夏の3か月、草刈りデーがあって、全部は参加できませんという話になったときに、それが課題なんですよってなって、ちゃんと話合いが生まれる。ファシリテーションしなかったら、話し合いがきついで若者たちは絶対その話はしたくない。

【明石座長】

- ・県全域でまちづくりをやるときは、本来は市町村がやればいい。南砺みたいに。富山県庁が直接、集落単位のコミュニティー支援をするというのは整理が必要。

【山崎委員】

- ・県からしたら、ちょっと手間がかかる。よっぽど末端まで気を使わなくちゃいけないけど、多分、それ自体が、成長戦略の最終段階の一番重要なところ。いいアイデア、いいビジョンで、わって盛り上がっているけど、どう落とし込んで、末端まで意味合いが届くかということが重要で、一番面倒くさい。
- ・私の頭の中では、いくつかの集落は小さい単位でちゃんと馬が合うファシリテーターが入って動き出したら、本当に動くと思う。何だったら、新しい祭りすらやれると思う。新しいセットをつくっちゃったり、魚パーティーをやったり米パーティーをやったりするかもしれないが、それがうまくいっちゃえばいい。

- ・うまくいかないところの 패턴の一つは、もう誰もプレーヤーがないから、誰かが背負い込んで大変なことになる。ファシリテーションがうまくいかない、ファシリテーターと馬が合わないか、アマチュアかなんかでこけることは、よくある。
- ・南砺市でも、井波以外に福野とか福光とかもやっているが、全然進まないと言って井波を見にくる人たちがいるらしい。それを聞いて、どういうことなんだろうと。お金を払って人を雇って、同じ様にやっているのに、どういうことだろうって。それは多分馬が合わないとか、やり方がちょっと雑。それも、集落単位で集まり方が違って、井波は奇跡的に主要メンバーにジソウラボが入っているから、何かあったら周囲の人達を巻き込める。でも、ほかの地域だと多分、誰か1人の肩に乗ってしまう。それがきつい。明石座長みたいに1人でもやりたい人がいるんだったらいいが。

【明石座長】

- ・佐藤委員がおっしゃっている話は、みんなすごく理解しているが、富山県の事業としてどうやるかという立てつけが難しいなというところ。やるべきだと思うが、立てつけを議論しなければいけない。そうすると、お題があるのが一番分かりやすい。富山県をこうしたいから、そういう人を募集するとしてチームを組んでもらうのは、県としてやりやすいという気がする。その課題は、ひとまず課題設定をしておいて、課題設定に取り組むチームをつくるけど、それをやりつつ違うこともやるとか、別の本当にやりたいことをやるとかということもありなのかなという気がする。
- ・射水も同じで、ジソウラボみたいなものがあつたらすごくいいと思うが、誰もいないので、自力で頑張るしかなくて、そこに射水市が支援してくれればいいが、そういうプログラムがない。そこで急に県に支援してくれと言ったら、県も困る。それって、射水市さんのことじゃないですかみたいな。こういう立てつけになっているので、富山県全体にかぶさるような課題設定をすると、やりやすいんじゃないかなという。

【佐藤委員】

- ・成長戦略会議ウェルビーイングプロジェクトチームにおいて、若い女性のウェルビーイングが低い、結婚するべきときに、結婚相手と出会うべきときに、女性がないという男女の不均衡をどうにかしなければいけないというのが喫緊の課題という議論をしている。

- ・若い女性が、富山が魅力的だと感じられていない。だって、年配の男性ばかりが地域のトップにいるから。

【山崎委員】

- ・そこは正直、若い女性たちはどうしたいのか。すぐに何かができるとしたら、全部の権限とお金を与えられるとしたら、本当はどうやって解決したいのか。

【佐藤委員】

- ・議員にも、若い女性に入ってほしいし、自分たち世代の代弁者がちゃんと地域の中心にいてほしい。

【荻布委員】

- ・確かに村の寄り合いには行きづらい。男性しかいないから。持ち回りの掃除の日などは、たまに女性がいるらしいが、役員会は男性しかいないので、例えば夫が行けなかったとしても、私が代打では足を踏み入れづらいという感覚はある。意識的に女性を入れるだけで確かに違うかもしれない。

【山崎委員】

- ・それも何か解が必要。要は困っている人がプレーヤーになって、ソリューションを考えるのが一番。だから、そのメンタル的なバリアを取り除くのに、例えば、新型コロナが男性しか狙わなかったら、年寄の男性から死んでいく。それが起きたとして、5年後、ほとんど40歳以上の男性が全員まるまる死にますといったときに、女性たちはどうしたいのか。
- ・資金はうん十年前からたまっている県のお金も市町村のお金もあるとして、議員のほとんどが死んだから、女性ばかりになったとする。自分達でいろんなファシリテーションをやって、リーダーシップを取れるようになったとして、その後どうやったら自分たちが自己実現しやすく、幸せでいられると思うか。

【佐藤委員】

- ・女性にちゃんと発言権があって話し合っていたら、私の意見じゃなくみんなの意見

で、いい方向に変わっていくと思う。

【川端委員】

- ・私は地域の年配の方、おじさんもおばさんも結構仲がいいので、発言力がないということを感じたことがあまりない。ただ、地域の集まりは、男性限定の雰囲気が強いので、そういうところには行けないが、別にそこで発言しなくても、直接、町内会長に言いに行ったりするので、私は多分そこまで切羽詰まっていななと思った。
- ・今は滑川に住んでいるが、朝日にいたときにも自治会長さんたちはやっぱり尊敬すべきことをやってきた、地域の責任をすごく担っている人たちなので、なるべく話を聞こうと思って、自分の住んでいる地域のみんなで、飲み会をしたこともあった。そのときは、一緒に地域の案内マップをつくろうという会だったので、町内会長さんたちに、自分の地域の自慢することを、私にまとめて手紙をくださいみたいな感じで言ったら、子供たちみんなに聞いてまとめてきたみたいな人もいたし、すごく素敵なものが集まった。そういうマインドを持っている方もいるけど、話合いの場で一緒にいられないというのはすごく感じている。一対一だったらすごくいい方ばかりで、お話しできるが、会議の進行が良くないのかもしれない。

【山崎委員】

- ・会議の進行が硬くて、自由に発言しづらいという面はある。それは、若者中心のイナミライですら硬い。まず、みんなが来る前にジャズを流して、来た順で適当に座らせないで、なるべく離したりして、ほかの人とくっつけない。全部、プロとしてのファシリテーションのテクニック。机もコの字とかに絶対しないし、全部パウポで、紙は使わない。紙を配るときは、みんなに書いてほしいときだけ。全体の紙にみんなが勝手に書きこんで、我々が後でまとめるようにして、地図をベースにしたり写真をベースにしたりして、市の担当者がいつもA1の紙を持ち歩いている。
- ・そういうふうに行っているから、雰囲気はクリエイティブ。あとは、1人が背負わないことにしているから、何かをやるっていったら、じゃ、島田さんと誰々さんでこれをして、あなたは次回のときに、これを準備してきてみたいなことをやるという自分たちなりのいろんなやり方がある。そういうのが大事。
- ・もちろん、推進協議会という年配の方の集まりに経過のプレゼンをしに行く機会やフ

アシリテーションをする機会があるが、わざわざ年配の方が動かなきゃいけないとか新しいことをやらなきゃいけないことを毎回入れる。普通のすごろくじゃない自己紹介すごろくをやって、自分が今まで人に言ったことのないようなことを話さなきゃいけない、最近一番おいしかった食べ物が何でできていて、どこから来たかをしゃべるとか、そういうことをやってもらう。VRが得意な人が井波にいたので、VRの機械を借りてきて体験してもらったり、新しいロースターさんのコーヒーを試飲してもらって、エチオピアとコロンビアとブラジルはこんなに違うのみたいな話をしてもらったりとかってなると、必ず想像しなきゃいけないんです、自分なりに。自分の意見や感想を言わなきゃいけないとなると、早く事務局が始めるよみたいなのが一切なくなる。いつもの自治会の事務局に指導権を握らせずに進めて、進行に必要なものは市の人たちが全部聞いてくれる。

【川端委員】

- ・全員を替えなくても、そういう場になっていけば女性も入れる。メンバーは新たに替えなくても、追加をしていくくらいで、上の世代もいるけど若者が入って混ざっちゃうとか。

【明石座長】

- ・分かりやすいイメージだと、山崎委員のチームが今は南砺市に雇われている。そういうチームを県が雇って、そのプロたちが必要な集落とかコミュニティとか、課題設定がしっかりしているところに入り込んでやるという形だと、ありではないか。集落ごとにプロを雇うのに、なぜ県なのという整理は必要だが。

【山崎委員】

- ・井波の場合は、南砺市全体ではまとまらないから、各地域で地域の20年後のビジョンを作ろうとしている。しかし今は、南砺市でも井波でしか地域ビジョンづくりは進んでいない。なぜかという、人的リソース（受皿）がないので。ほかの地域では、うまくいっていない。
- ・ただ、その型だと横展開はできる。朝日町のこの地区とか、小さい町だったら町全体でもいいんだけど、その地区で、みんなの20年後のビジョンを描きましょうと。プロセス

は1年とか2年ですみたいにして。そうすると、我々の戦略計画書のプロセスは全部決まっているから、こういうやり方がありますよって言って。絶対、穴がある。こんなこと考えたこともありませんって。その穴が開いているところを見た上で、その地域のためのプロセスをつくってあげて、これからこういうことをやりますよってアンケート調査とか、歴史の調査とか経済の調査とかを全部した上で、SWOTアナリシスをやっ
て、段階によってはワークショップをやっ
て、そういう組織をつくって、組織の運営が決まる。それで1年くらいはかかっちゃうし、あと組織というのは、要は任意団体。そうすると、金が動かないので、次は株式会社か一般社団法人を立てる。そこでお金が動くようにするということをもとめるのに、はじめからそれをやりますよというのを種植えしていかないと、重鎮も市も、それには賛同できないというのを、今でも井波でも結構苦勞をしていて。そういうふうになってくると、あとはファシリテーターが入らなくても、その会社で動かせばよくなる。

【明石座長】

- ・ 県でビジョンをつくるという立てつけを、どうするかというところがキーになるのかなということで、その集落、特に田園地域の集落で抱えるいろんな問題解決のために、実は意外と集落に人材はいるかもしれない。若者も、とか、つくろうとしたらつくれる。県が直接そこに支援をするという話になると難しいが、富山県の田園地域共通で抱える課題設定の下であればそれができるんじゃないか。県で、直接派遣できる専門家チームをまずつくって、その課題設定に適合した集落に対して、プロフェッショナルないろんなリソースを提供しますよと。集落でいろいろ計画をつくってもら。ただ、課題設定というのは、ほかでもモデルとなるようなものじゃないといけませんよという。百姓的人材育成システムのモデルとなるので、プロフェッショナルのいろんなリソースを提供しますよと。
- ・ ただ、何をやるんだという課題設定は別に必要で、先ほどの空き家をどうするんだとか、耕作放棄地をどうするんだとか、農業の6次化をどうするんだとかというものを、まずは課題設定として挙げて、それに適合するコミュニティを支援しましょう、そんなことを考える1年間に、来年はしましょうよみたいな方向はどうか。

【山崎委員】

- ・百姓的人材の育成が取組みの目標の一つであれば、県全体で、毎年度支援した地域が集まって、発表会的な祭りができる。必ず農村のどこかが持回りで、そういうイベントをやって、それをほかの日本国内も海外も含め、農村の人たちは見に来る。
- ・実際、これから長い間をかけて、各国の人口はどんどん減る。こう成り得ると、それをやることによって、多分徐々にほかの農村でうまくいっていることの知識もこっちに植え込める。例えば、トスカーナ地方ってすごい。トスカーナから誰か来てもらったり、エクステンジもできるので、それをやるための措置として県がこういう取組みをつくって支援するというのは、全然あり。

【明石座長】

- ・もう1つの視点として、今、山崎委員がおっしゃったように、外からどう見えるかという視点も、やっぱり必要。なので、富山県が外から見てどう見えるかという部分では、何か形になるものを発信していかなくちゃいけない。お祭りのなものとして見えていけるけれども、やっていることは、実はコミュニティの最小単位で地道に課題解決をしているんですよということが、3レイヤーぐらいになっていて、それをうまくやることで外から「富山の田園、素敵だね」って見えるし、地域の方はボトムアップで、課題解決するためのチームをつくって地道にやっていく。すり合わせがどこかで起こって、そこで富山県の田園地域の継続的な魅力づくりができるねみたいなので、10年間、走らせていくみたいな。